



序章

桐生の都市再生における ノコギリ屋根工場群のもつ意味と意義

桐生は織物産業と緊密な関係をもって発展し、経済的、社会的そして文化的な桐生の固有性は織物により築かれてきた。その過程のなかで、ノコギリ屋根工場は、日本が近代化に邁進した明治時代後期以降の桐生を現在に伝える重要な要素となっている。しかし織物からの産業構造の転換は、ノコギリ屋根工場にこれまでのありかたのまま存続するという状況を必ずしも許さず、その結果、一部に使用目的の転換、また一部には取り壊し、消失という変化を強いることになった。その数は少なくはなく、したがって、織物とノコギリ屋根工場が桐生の特性を生みだしてきたというためにも、また今後の桐生がどうあるべきかということに関しても、その保存と活用が問題となってきている。

こうした都市構造の変化にもとづく都市の変容は、さまざまな問題を引き起こしているが、とくに地方都市においては、中心市街地の存在意義の低下と、都市全体の没個性化という点に顕著であるといえる。中心市街地の没落という現象は、とくには商業的、経済的な問題となるが、そこが住む魅力を失いつつあることから居住環境の問題でもあり、中心部の住民の高齢化などもその現れのひとつである。他方、都市の個性喪失は、建築やまちなみが地域性あるいは都市の営みを表現しなくなったことに起因する。これは、住民が求めたというよりも、区画整理と再開発により、いわゆる効率的な都市造りを押し進めようとしてきた行政の意向や、地域性などの特徴をなくすことが近代的であるという価値観の反映として捉えることができる。とくに後者に関しては、建築家をはじめ建築関係者の与えた影響は大きい。近代建築が、また伝統的な都市構造を変えることが近代化であり、さまざまな問題を解決すると主張してきたからである。しかしそれがむしろ先にあげた問題を生じさせたと認識されたとき、都市再生が次の課題となったといえるだろう。

再生という課題には、ひとつ重要な条件がある。それは、再生されるためには、その源泉、基礎がなければならないということである。再生は、過去からの積み重ねや継承なしに、考えられないことは明らかであろう。多くの都市を疲弊させたり特色のないものにした、単なる建設であってはならないのである。その条件からして、桐生における都市再生はノコギリ屋根工場に依拠しており、また都市再生が言葉本来の意味もっている。桐生のアイデンティティを伝えるとともに創りだしていくノコギリ屋根の建物は、過去から継承していくべき遺産（近代化遺産）であるし、また言葉を換えれば、桐生が蓄積してきたそして活用していくべき資産、資源ともいえる。それはまさに、桐生の個性を創出し、いまも表現しているからである。

桐生の都市再生をより現実的にしていくためには、ノコギリ屋根工場の現況の把握と、建物のもつ問題点の分析が肝要である。桐生の織物産業の有してきた性格がその建物に反映されているからであり、それが都市の再生をどのように可能とするかに影響をおよぼすからである。例えば、織物工場としてみると、技術発展による作業内容の変化から、建物を従来と同じ状態では使えない場

合も生じてきている。また、元来小規模経営の多かったことから、建物の大きさや敷地内での工場とほかの建物との関係などから、居住そのものに影響が与えられ、それが使用目的の転換やあるいは活用に関する問題となることもある。さらに建築後短くてもすでに40年以上たっており、老朽化にどう対処するか、あるいは維持管理はどのように、まただれがすべきか、技術的な問題だけでなく、支援していく体制づくりも求められている。

こうしたさまざまな問題を一気に解決することはできないまでも、今回与えられた主題は、まず問題点の所在を明らかにし、ついで解決の方向性を見極めることにあるだろう。行政のできること、民間のすべきこと、所有者の考えること、そして支援する側のなすべきこと、さまざまな立場からノコギリ屋根工場にいかなる貢献が可能かを考えたい。ノコギリ屋根工場という遺産の継承が、これからの桐生を、その個性をより豊かで意義あるものにしていくからである。